

電話会話における終結部研究の動向

—日米・日韓を比較した研究を中心に—

林 美善

要 旨

本稿では、主に会話分析の枠組みで行われた電話会話終結部研究を概観した。具体的には、(1) 終結部の構造を明らかにした Schegloff & Sacks(1973)と Clark & French(1981)の研究を紹介し、(2) 彼らの終結部の構造に基づいて行われた日本語の終結部研究を概観した。その際、日米比較・日韓比較を行った研究を中心に見ていき、そこに現れた文化的な相違にも触れた。また、(3) 日本語母語話者と学習者の電話会話の終結部を取り上げた研究にも触れ、今後の日本語教育への示唆を模索した。

【キーワード】 終結部、 pre-closing、 closing、 談話標識、 文化的な相違

1. はじめに

電話というコミュニケーション手段は、今や我々の生活において欠かせないものになっている。駅のプラットフォームで電車を待つ間に周りを見回すと、至るところで携帯電話を手に夢中になって話している人が珍しくない。忙しい現代生活の中で電話で行われるコミュニケーションはその短時間で終わらざるを得ないため、対面会話より一層多くのコミュニケーションの場になっており、出会いと別れの場になっているかもしれない。

このような実用的重要性を反映して、電話会話の話術やエチケットをめぐる手引き書が日本でも少なからず出版されている(日本経済新聞社 1997)。しかしその一方で、日本語での電話会話の実態を科学的・実証的に分析究明した研究は、実はまだ質量ともに乏しい。そういった研究の今後の進展がまたれている。

さらに、談話研究の研究対象としても、電話会話はいくつかの魅力的な側面をもっている。まず、電話会話は対面会話と異なって、始まりと終わりが明確であり、一まとまりの一単位としての会話を設定しやすい。また、「かけ手」と「受け手」の1対1の音声だけのやりとりで構成されるため、参加者の相互作用を分析する上で便利である(西坂 1992: 40)。電話会話の全体的構造は「開始部」、「主要部」、「終結部」という三つの部分からなると考えられる(岡本 1990; 小野寺 1992; ザトラウスキー 1993)。本研究

ではその中で「終結部」において行われた研究を概観する。

田中(1982)は「何らかの接触が持続していてプラスの方向に高まっている関係が、『別れ』が起こる際には、その維持しようとする力とは逆方向の行動に出る必要がある、それゆえ、互いの関係にマイナスの影響を与えるおそれがある」と述べている(田中 1982: 38)。田中は対面場面を想定し指摘しているが、音声だけで行われる電話会話の終結においてはさらに切実な問題であると考えられる。

Levinson (1983)は、参加者の中のある一方がまだまだ話したいことがあるのに終了が始まってはいけないうし、急ぎすぎや間の抜けた終焉は会話参加者間の付き合いにも気まずい関係を持ち込むという点で、終了というのは技術的にも社会的にもデリケートな問題であると指摘し、終結部を組み立てる手立ては、このような問題にうまく対処していると述べている(Levinson 1983: 316)。

本稿では、電話会話終結部研究を概観するが、その際、1)まず、終結部の構造を明らかにした Schegloff & Sacks (1973)と Clark & French (1981)の研究を紹介する。2)次に、彼らの終結部の構造に基づいて行われた日本語の終結部研究を概観する。その際、日米比較・日韓比較を行った研究を中心に見ていき、それぞれの文化的な相違にも触れる。3)最後に、日本語母語話者と学習者の電話会話の終結部を取り上げた研究にも触れ、今後の展望と可能性を探る手立て

としたい。

2. 終結部の構造

2.1 Schegloff & Sacks (1973)の終結部研究

電話による会話行動を、実際のデータをもとに詳細に研究したエスノメソドロジーという学派がある。小野寺(1992)によると、エスノメソドロジーはもともと学問的には哲学的観点を基盤としているが、社会学者 H. Garfinkel の手によって発展し、とくに会話分析に適用されてからは、H. Sacks, E. A. Schegloff, G. Jefferson といった人たちが帰納的研究を積み重ねてきた。小野寺は、エスノメソドロジーの電話会話研究について「電話会話行動を人間の社会的行動の一部として、精巧に、系統立てて記述・整理してきたもので、電話会話を分析する際に、大きな指針となるものである」と述べている(小野寺 1992:26)。

Schegloff & Sacks (1973)は、電話会話が一定の手続きを経て終結することを明らかにしている。彼らによると、会話の終結というのは成り行きに任せるのではなく、明確に成し遂げるべきものとして、つまり、会話組織でのある問題を解決すべきものとしてみなさなければならない。終結という問題に対して Schegloff & Sacks は、「一人の話者の発言の完了が他の話者の発言する機会にならないような地点に会話の参加者が同時に行き着くようにどう組織するか」の問題であると述べている(Schegloff & Sacks 1973 : 294-295)。彼らによると、ただ止めるといった方法で会話を終了させようとするのは、会話内の出来事として解釈されてしまうし、さらには会話において生じた行為(怒り・無愛想・不機嫌)として分析されてしまう。そこで、Schegloff & Sacks は、会話の終結の問題を終結部(Closing Section)という「部分」の問題としてとらえ、その解決を試みる(岡本 1990)。

Schegloff & Sacks (1973)が提案する終結部の構造は、pre-closing と closing という二つの部分からなる。前者は、会話の参加者の一方が「もうこれ以上話すことがない」との声明を出し、もう一方がそれに同意する部分であり、後者は、pre-closing の声明に同意が得られた時に、電話の参加者が最終発話交換を行い、電話会話が終了される部分である。以下にその具体例を示す。

<英語例>

- 1C O.K. pre-closing 声明
 2R O.K. pre-closing 受け入れ

.....pre-closing

3C Bye bye. 最終発話交換

4R Bye. 最終発話交換

.....closing

(例文は schegloff & Sacks 1973、それ以外は筆者付記)

<日本語例>

1C はい じゃ よろしくお願ひします。

pre-closing 声明

2R はい わかりました。

pre-closing 受け入れ

.....pre-closing

3C はい じゃ 失礼します。

最終発話交換

4R はい さよなら。

最終発話交換

.....closing

(岡本・吉野 1997:50)

Schegloff & Sacks は、終結部を開始するための pre-closing の方略として、①“O.K...” “Well...” 等を用いる方法 ②相手の関心を利用する方法(This is costing a lot of money.) ③会話の中で展開された題材を用いる方法(Okay, I letcha go back tuh yer Daktary.) ④相手の関心を利用しない方法(I gotta go.)があり、これらの方法を用いることにより、会話を終了する正当性が得られると述べている。また、彼らによると、最終発話交換において、隣接ペア(adjacency pair)といった直接的な組織化のための手立てが利用されることにより、会話の終了が可能になる。隣接ペアというのは、隣接した位置におかれ、別々の話し手が生成する二つの発話である(挨拶-挨拶、質問-返答、提案-受諾/拒否)。この別々の話し手により生成される隣接した二つの発話は、一つの発話だけでは行えないことをなし得る。自らの発話が了解・誤解・訂正されたことなどが、それとして理解できるのは隣接した発話の位置関係を利用することで可能になる(Schegloff & Sacks 1973 : 297-298)。

2.2 Clark & French(1981)の終結部研究

Schegloff & Sacks と同じく電話会話を分析した Clark & French (1981)は、Schegloff & Sacks の理論をさらに発展させ、終結部の構造を以下のように三つに分けている。

1. Topic termination(話題終結) : This function is served by the pre-closing statement and its response, e.g., okay-okay (pre-closing の声明と応答).
2. Leave-taking(いとまごい) : This function is served by the material following the pre-closing statement and its response and including the goodbye exchange (pre-closing の声明と応答に続く部分で最終発話交換までを含む).
3. Contact termination(接触終結) : This function is served by the clicks of the telephones being hung up (電話を切る音) .

(Clark & French 1981:3)

電話会話終結部研究の流れにおける Clark & French のもっとも大きな貢献は、二番目の Leave-taking (いとまごい) を挙げたことにある(藤原 1998)。Leave-taking (いとまごい) の基本的な機能は reaffirmation of acquaintance(人間関係の再確認) であると彼らは述べる。これは、終結によって訪れる別れは一時的なもので、会話の参加者の関係は依然として続いていて、近い将来、社会的接触を再開するのだということをお互いに確認し合い、安心する過程である。Clark & French によると leave-taking は次の順序で現れる。

- (1) Summarize the content of the contact they have just had (電話で話した内容をまとめる).
- (2) Justify ending their contact in this time (終結を正当化する).
- (3) Express pleasure about each other (お互いの喜びを表明する).
- (4) Indicate continuity in their relationship by planning, specifically or vaguely, for future contact (お互いの関係がこれからも持続することを示す).
- (5) Wish each other well (お互いのために祈る).

(Clark & French 1981:4)

後に詳しく紹介するが、この leave-taking に現れる要素は言語によって相違が見られ、これらの要素がそれぞれの文化的な背景と関わっていることが示唆される。

以上述べた Schegloff & Sacks, Clark & French の終結部の構造に基づいて日本でも 1990 年代に入り、岡

本(1990)、小野寺(1992)、熊取谷(1992)などにより、終結部研究が幅広く行われている。これらの研究は日本語の終結部の構成要素を抽出しつつ、日米・日韓比較を試みるものも多く見られる(岡本 1990、1991; 小野寺 1992; 藤原 1998; 金 1998; 林 2001)。次章では、日米・日韓比較を中心とした日本語の終結部研究を概観する。

3. 日本語の終結部研究

まず、Schegloff & Sacks (1973) と Clark & French (1981) の研究を含め、日本語の主な終結部研究を以下の表 1 に簡単にまとめて示す。

表 1 電話会話の終結部に関する主な研究

| 研究者 | 研究対象 | 主な研究内容 | 終結部の構造 |
|--------------------------|--|------------------------|--|
| Schegloff & Sacks (1973) | ・英語 ・自然談話 | ・終結部の構造 | ・ pre-closing ・ closing |
| Clark & French (1981) | ・英語 ・大学の問い合わせの電話 (739 件) | ・終結部の構造 | ・ topic termination ・ leave-taking ・ contact termination |
| 岡本 (1990) | ・日本語 ・7 人の複数の電話会話 | ・日本語の終結部の構成要素 ・日米比較 | ・ pre-closing ・ leave-taking |
| 小野寺 (1992) | ・日本語/英語 ・一主婦の電話会話 (26 回) | ・日米比較 | ・前終結 ・人間関係の再確認 ・最終的やりとり |
| 熊取谷 (1992) | ・日本語 ・大学生 (445 会話) | ・談話機能「じゃ」「はい」 | ・前段終結 ・最終発話交換 |
| 岡本・吉野 (1997) | ・日本語 ・母語話者 (174 例)/ ・学習者と母語話者 (45 例) | ・日本語母語話者と学習者の相違 | ・ pre-closing ・ closing |
| 藤原 (1998) | ・日本語/英語 (日:68 名/ 米:44 名) | ・日米比較 | ・前終結 ・人間関係の再肯定 ・最終的やりとり |

| | | | |
|-------------|--|---------------|---------------------------------|
| 金 (1998) | ・日本語/ 韓国語 ・日韓の 女子大生 (日:5名/ 韓:6名) | ・日韓対照 | ・ pre-closing ・ leave-taking |
| 林 (2001) | ・日本語/ 韓国語 ・20代の 男女 (日:20名/ 韓:20名) | ・日韓対照 ・男女差 | ・ pre-closing ・ closing |

3.1 日米比較

1990年代に入り始まった日本語の終結部研究においては、終結部の構造に関する一致した見解は見られず、各々の研究目的に合わせてさまざまな終結部構造を設けている。例えば、岡本(1990)は終結部を Clark & French の終結部の構造に基づいて pre-closing と leave-taking に分けてその構成要素を抽出し、日米比較を試みている。またさらに、小野寺(1992)・藤原(1998)は、pre-closing、reaffirmation of acquaintance、terminal exchange と、終結部構造を三つの部分に分け、それぞれにおける日米比較を試みている。

詳しく見ていくと、まず、岡本(1990)は日本語の終結部を pre-closing と leave-taking の二つに大別し、カテゴリー化している。その詳細は表2に示すとおりである。岡本は、表2に示す要素で構成される終結部のやりとりが、会話が終わっても二人の関係は終わりではないということを示し、次の行動との間をつなぐ役割を担う部分として重要であると述べている。

さらに、小野寺(1992)は、エスノメソドロジーによる電話会話の研究と日本語の実際の電話会話の終結部を分析し、日米比較を試みている。小野寺は、英語においては Schegloff & Sacks (1973)で述べているように、もっとも典型的な「前終結」の声明は“O.K.”、“Well.”であるが、日本語の場合は「じゃ」が多く現れ、「じゃ」は電話会話を終結に導きたい意思を表すディスコースマーカであるとして述べている。また小野寺は、日本語の終結部の全ての部分において「謝り」が頻繁に行われ、日本語の場合、「謝り」は別れる前のマイナス面修正の重要な方法であるが、アメリカ英語ではほとんど見られないものであると述べている。一方、アメリカ英語で多く用いられ、日本では用いられ方の少ないストラテジーとして、「互いの喜びの表現」、「互いのための祈り」を挙げ

ている。小野寺は、40代の主婦一人の電話会話(26回)を分析していることからその属性が反映されている可能性があるが、日韓の20代の男女40人の電話会話を分析して日韓対照を行った林(2001)の日本語話者の終結部にも「謝り」が観察され、小野寺を支持する結果が見られる。

表2 岡本(1990)の終結部(Closing Section)の構成

| | |
|---------------------------|--|
| <Closing Section の組織的構成> | |
| A. Pre-closing の方略 | |
| 1. | 総括の表現によりこれ以上会話が必要ではないことを示す。(「じゃ、そういうことで」など) |
| 2. | 今までの会話内容をまとめてみる。 |
| 3. | 会話内容の結論を述べる。 |
| 4. | 会話内容や結論から導き出される行動を確認する。(「じゃ、電話を入れておきます」など) |
| 5. | 会話の始まりや会話中の話題を呼び戻す。(「じゃ、また、勉強つづけてください」など) |
| 6. | 「殺し文句」、または「落ち」をつける。 |
| 7. | 外部事情を示す。 1) 相手の利益・権利を触れる。(「長くなると、悪いから…」など) 2) 自分の事情を持ち出す。「もうちょっとしたら、でかけるので…」など |
| B. Leave-taking | |
| 1. | 将来における再接触の約束(「また、電話します」など) |
| 2. | 感謝・おわびの表明又はその繰り返し 1) 儀礼的な決り文句(「わざわざ、すみません」など) 2) その他一般的感謝・おわびのことばの繰り返し |
| 3. | お互いの幸せや健康を祈る。(「気をつけてね」「がんばってね」など) |
| 4. | 伝言(「ご家族のかたによるしく」など) |
| 5. | 別れのことば 1) 一般的な別れのことば(「ごめんください」「バイバイ」など) 2) 内容によってある程度決まっていることば(「よろしく願います」<依頼>) |
| (岡本 1990 : 148-149) | |

以上述べた日米比較研究の問題点としては、藤原(1998)でも指摘しているように、被験者の数が少な

い、被験者の年齢、性別などの社会言語学的コンテキストがそろえられていないことが挙げられる。そこで藤原(1998)は日本人 68 名とアメリカ人 44 名を対象に、日米比較を行っている。藤原は、日本人母語話者間、アメリカ国籍をもつ英語話者間の友人同士による電話会話を分析し、1) 日本人とアメリカ人では、終結部を構成する機能単位の種類に違いが見られる 2) 日本人の会話終結部構造はアメリカ人の会話終結部構造に比べ、複雑である、という二つの仮説を設け、その検証を行っている。その結果、いくつかの構成要素については日本人、アメリカ人の使用頻度に関する特徴が明らかになり、また、終結部構造の複雑さについても日本人終結部の方がより多くの要素から複雑に構成されているという結果が得られた。しかし、藤原では日米のデータの数に差があり(日本語 50 例、英語 31 例)、それが終結部を構成する機能単位の種類に影響している可能性がある。

その他、電話会話の終結部に見られる談話標識についての研究には熊取谷(1992)の研究がある。熊取谷は、日本語の電話会話の終結部に現れる「じゃ」と「はい」の機能についての分析を行い、終結部に現れる「じゃ」については、「談話の後方指向の区切り標識として機能し、前段終結、最終発話交換へ移行或いは前段終結内での移行を先導する役割を果たす」と述べている(熊取谷 1992: 23)。今石(1992)も「話し手の情報伝達が終わりに近づいたとき、接続詞『それでは・じゃ』を使って相手に終了部への移行を伝える」と述べ、熊取谷と同様の見解を示している(今石 1992: 70)。

次に、終結部に現れる「はい」について、熊取谷は「先行発話の内容を受け入れるだけでなく、終結に向けるための談話進行の促進という機能をもつ」と述べている(熊取谷 1992:23)。岡本・吉野(1997)は、終結部に現れる「はい」の機能についてさらに詳細な分析を加えている。岡本・吉野によると、日本語母語話者の終結部において単独で用いられる「はい」は、終結部の中の移行場所の第 2 発話部においては聞き取り表示としての応答のみになり、「はい」のみでは、終結への意図を暗示するというメタメッセージに対する受け入れとしては機能せず¹、かえって会話の流れを滞らせる結果になると指摘している。

3.2 日韓比較

電話会話の終結部に関する日韓対照を行って

る研究には金(1998)がある。金は、日韓の女子大生を対象に、参加者が主要部において提示された話題をどのように終結部へと結びつけていくのかについての分析を行っている。その結果、韓国語話者の場合、主要部において提示された話題の中で、まとめが残ったまま他の話題に転換していたものを最後の話題として提示し、その話題をまとめることで終結部に向かっていくケースが多く見られるのに対し、日本語話者の場合は、既に結論の出ている既出話題の内容に触れることによって終結部に向かっていく傾向が見られると述べている。

また、「会話終結における相互作用」については、韓国語話者の場合は、認識した地点で「接触終了の場面」を協力して作っていくのに対して、日本語話者の場合は、「接触終了の場面」を回避し、一方の参加者に頼っている傾向があると述べている。即ち、岡本(1990)で指摘しているように、日本語話者の場合、受け手は決定的な別れのことばを自分の方から述べることを避け、新しい話題を提供せず、順番をパスしていく傾向があることを指摘している。

林(2001)は、日韓の 20 代の男女 40 組 80 人の電話会話の終結部を分析し、日韓対照を行っている。林は、Schegloff & Sacks (1973)の分析方法に基づいて終結部を pre-closing と closing に分け、それぞれの構成要素を抽出し、それに基づいて日韓の相違点を述べている。林によると、韓国語の pre-closing の声明には $\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]^2$ という談話標識が多く現われる。

韓国語の話し言葉における $\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]$ は、単独でも、文中でも頻繁に使われ、その機能も意味的役割も多様である。 $\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]$ の主な機能としては、応答詞としての機能が挙げられるが、その他に、相づちの機能、発話者自身の感動、自分の発話に対する納得、反問、同意要求、問いただし、話し手の発話の内容とは直接関係なく、話題転換の機能として使われることがある(金 1992)。

$\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]$ の話題転換機能についてイ(1996)は、次のように述べている。

$\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]$ の話題転換機能は電話を締めくくる場面でよく現れる。即ち、 $\text{ㄱㄹ}[\text{gure}]$ を発話することによって話者はその間電話で充分な話題が取り上げられたと判断して新しい話題、即ち、電話を締めくくる発話が続くことを聞き手に知らせるのである。

(イ 1996:16)

pre-closing の声明に用いられる談話標識として、英語では“O.K.”、“Well.”が、日本語では「じゃ」が典型的なものであると述べだが、韓国語においてはこの話題転換機能の끄래[gure]が典型的なものであると考えられる。また、岡本・吉野(1997)は、日本語の終結部における「じゃ」について、pre-closing の声明においてのみ「じゃ」を出すのではなく、終結を迎えるまでお互いに何度も出し合って終結への意向を確認すると述べているが、韓国語の끄래[gure]の場合も、pre-closing の声明においてのみではなく、終結を迎えるまで頻繁に現われ、終結への意向を確認するとともに、最終発話交換が自然に行われるよう、調整し合う傾向が見られる。

その他、林は、1) pre-closing の声明において、日本語の場合、終結へのメタメッセージを伝える発話が見れるのに対し、韓国語の場合は、「切る」のように終結を直接的に言いつつ発話が観察される、2) 親しい友人同士の電話会話であるにも関わらず、日本語の場合、終結部においてスピーチレベルをシフトさせる発話が多く見られるのに対し、韓国語では皆無である、3) closing において日韓それぞれの特徴的なものとして、日本語の場合は「お詫びの表明」が現われ、韓国語の場合は「再接触の要求」が現れる、などの相違を示している。また、終結部全体が長くなるか、短くなるかという問題には日韓の相違が見られず、日韓の女性話者の方が男性話者の方より終結部全体が長くなる傾向が見られると述べている。

ところで、Schegloff & Sacks(1973)は終結部に欠かせないものとして、最終発話交換を挙げているが、この最終発話交換においても日韓の相違が見られる(林 2001)。藤原(1998)は、最終発話交換を「別れのあいさつで会話を終わらせる場合(例：バイバイ、お休みなさい等)」と「別れのあいさつ以外で会話を終わらせる場合(例：うい、はい等)」の二つに下位分類して、日本語のほとんどの最終発話交換が「別れのあいさつ」を用いていると述べている。それに対し、林(2001)では、韓国語の場合、全てのデータにおいて別れの挨拶以外で会話を終わらせる最終発話交換(ex.어- [o:]³, 응- [u:ng]⁴)などが見られると述べ、日本語との相違を示している。

さらに林は、韓国語の最終発話交換に現れる어- [o:] と응- [u:ng] に現れる順序性に着目し、어- [o:] は必ず응- [u:ng] に先立つ傾向があると

述べている。即ち、最終発話交換に現れる어- [o:] と응- [u:ng] の組み合わせにおいて、①어- [o:] だけの組み合わせ、②응- [u:ng] だけの組み合わせ、③어- [o:] - 응- [u:ng] の順序で現れる組み合わせは現れても、④응- [u:ng] - 어- [o:] のような順序で現れる組み合わせは観察されなかったと述べている(林 2001 : 87)。

以上、日米比較・日韓比較を中心に行われた主な終結部研究をみてきたが、次は、終結部に現れた文化的な相違を取り上げた研究について述べる。

4. 電話会話の終結部に見られる文化的な相違

終結部に現れる文化的な相違を取り上げた研究としては、日米を比較したものが多く見られる。まず、岡本(1990)は、英語の終結部の構成要素としては示されなかったが、日本語では明らかに会話終結を導くものとして「感謝やおわびの表明またはその繰り返し」を挙げて、これは「好意のやりとりによってお互いの関係がマイナスにならないようにしながら、新しい話題を提供しない方法」であり、「別れ」の後に続く行為への橋渡しの機能を十分に担っていることを指摘している。また、一方、英語では構成要素として「お話できて、とても楽しかったです」というような「喜びの表明」が現れるが、日本語においては一例も見られなかったと述べている。

同じく終結部の日米比較を行っている小野寺(1992)は、岡本(1990)と同様の見解を示しつつ、Brown & Levinson (1987)のPoliteness理論を用いて、興味深い提案をしている。日本語では終結部の全ての部分において「謝り」が行われ、その用いられる比率も高い。これはBrown & Levinson (1987)のいうネガティブな丁寧さ(negative politeness)⁵を実現したものであり、アメリカ英語ではほとんど見られない。一方、英語の終結部に現れる「互いの喜びの表現」、「互いのための祈り」は、ポジティブな丁寧さ(positive politeness)⁶を実現したものであり、日本語ではそれほど比重は大きくないが、アメリカ英語では社会的にも定着し、極めて重要な別れの挨拶表現となっている。結論として小野寺は、電話会話の終結部を統制している文化的な大きな決まりの一つは、言語社会が持っている丁寧さを具現化する仕組み、即ち、ネガティブな丁寧さ(日)、ポジティブな丁寧さ(米)であると提案している。

以上は、日米の電話会話の終結部に現れる文化的

な相違を取り上げた研究であるが、日本語母語話者と日本語学習者の電話会話を分析した研究も見られる。

5. 日本語母語話者と日本語学習者の電話会話の終結部

岡本・吉野(1997)は、日本語母語話者と中級レベル以上の日本語学習者の電話会話を分析し、日本語母語話者が学習者との電話会話で違和感を感じる要因を探っている。ここで岡本・吉野は、まず、母語話者による協力的な話者交替による終結の場合、1) pre-closing の声明においてのみ、「じゃ」を出すのではなく、お互いに何度も出し合って終結への意向を確認する、2)お互いが新しい慣習的発話を次々と出し合い、最後の別れのことばが自然な話者交替によって交わされるよう調整し合う傾向が見られると述べている。それに対し、非母語話者の場合は、「じゃ」及び「はい」の機能を十分に理解していないか、適切な運用ができないことを指摘し、非母語話者は隣接ペアの完成という局所的な処理という観点からはスムーズに運んでいるようにみえても、全体機構における終結へのメタメッセージの理解や運用においては問題が残り、それが日本語母語話者に違和感を感じさせる結果となっていると述べている。

岡本・吉野の研究は、日本語母語話者と日本語非母語話者の電話会話を比較し、それぞれの特徴を明らかにしたという点で評価できる。しかし、日本語非母語話者の場合、台湾と英語圏の学習者の会話例しか挙げておらず、そこから見られる特徴がその他の国々の学習者にも共通する特徴であるかどうかが明確でない。多様な国々の学習者の会話例を豊富に提示することによって一連の特徴を明示的に示す必要があると思われる。

6. 今後の展望

これまでの研究を概観すると、欧米で終結部構造の基礎が築かれ、日本での研究はそれを踏まえ、日本語における終結部の構成要素を解明し、かつ、日米比較を行ってきた。しかし、今までの研究は欧米で終結部研究の基礎が築かれたこともあって、日米の比較が主であって韓国・中国などアジアの国々との比較対照研究はあまり行われていないようである。また、日本語母語話者と学習者の電話会話を取り上げた研究も少ないと思われる。林(2001)が指摘して

いるように、電話会話の終結部において、韓国語話者の場合は友達同士の電話会話である場合、スピーチレベルが一定しているのに対し、日本語話者の場合は「pre-closing の声明」及び「相手をねぎらう発話」においてスピーチレベルをシフトさせる例が多く見られる。このような相違が見られることから、学習者と母語話者の会話の比較分析を行い、違和感を感じる部分を綿密に調べていくことが必要であろう。

また、会話の終結は、それがうまく行われぬ場合、参与者間の付き合いにも気まづい関係を持ちこむ恐れのあるデリケートな問題である以上、日本語教育では電話の開始部の導入だけでなく、先行研究から明らかになった終結部における「じゃ」の談話機能及び日本語の終結部に見られるスピーチレベルのシフトに関する指摘なども教室現場に導入する必要があると考えられる。

注

1. 岡本・吉野(1997)によると、ここでは、終了の注目表示である「わかりました」や終結へと進める慣習的な発話が必要である。
2. 音声記号(IPA)では [gʲure] であるが、便宜上、これ以降すべて [gure] と表記する。
3. 音声記号(IPA)では [ɔ:] であるが、便宜上、これ以降すべて [o:] と表記する。
4. 音声記号(IPA)では [u:ŋg] であるが、便宜上、これ以降すべて [u:ng] と表記する。
5. 「聞き手の、縄張りを守りたいという基本的欲求を満たす」ことを指向しており、「遠ざける」ことを基盤にした丁寧さ (小野寺 1992)。
6. 「話し手も、聞き手の欲求を満たしたい」のだということを示し、相手に「接近する」ことを基盤にした丁寧さ (小野寺 1992)。

参考文献

- 今石幸子 (1992) 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11 巻9号, 65-72.
- 林美善 (2001) 「電話会話の終結部に現れる日韓の相違に関する一考察—日韓の 20 代の親しい友人同士の電話会話から—」『言語文化と日本語教育』第 22 号, 78-91.
- 岡本能里子 (1990) 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72, 145-159.
- 岡本能里子 (1991) 「会話終結の談話分析」『東京国際大学論叢』44, 117-133.
- 岡本能里子・吉野文 (1997) 「電話会話における談話管理—日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析—」『世界の日本語教育』7, 45-59.
- 小野寺典子 (1992) 「エスノメソドロジーにおける電話会

- 話の研究と日本語データへの応用』『日本語学』11 巻 9 号, 26-38.
- 金敬善 (1998) 『会話終結部の談話分析—韓日大学生の電話によるやりとりの対照研究—』(未公刊) 静岡大学修士論文
- 金善姫 (1992) 「韓国語の談話における「gure」の用法—日本語の「はい」「ええ」と比較して—」『対照研究—談話マーカーについて—』筑波大学つくば言語文化フォーラム 21-41.
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』11 巻 9 号, 14-25.
- ザトラウスキー、ポリー (1993) 『日本語の談話の構想分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 田中望 (1982) 「『別れ』の言語行動様式—日米の比較のために—」『言語生活』363, 34-46.
- 西坂仰 (1992) 「エスノメソドロジーは、どういうわけで会話分析を行うようになったか」『エスノメソドロジーの現実—せめぎあう<生>と<常>—』世界思想社 23-45.
- 日本経済新聞社編 (1997) 『ビジネスに活かす電話応対術』日本経済新聞社
- 藤原智栄美 (1998) 「電話会話における終結部構造の日米比較」『大阪大学留学センター研究論集多文化社会と留学生交流』第 2 号, 1-13.
- 이한규(1996) 「한국어 담화 표지어 「그래」의 의미 연구」『담화와 인지』3, 1-26.
(イ ハンギュ 1996 「韓国語談話表示語「gure」の意味研究」『談話と認知』1-26.)
- Brown, Penelope & Stephen Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, H. H. & J. W. French. (1981) Telephone goodbyes, *Language in Society*, 10, 1-19.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子訳 1990 『英語語用論』研究社)
- Schegloff, E. A. & Sacks, H. (1973) Opening up closings, *Semiotica*, 8, 289-327. (北澤裕・西沢仰訳 1989 「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学：知と会話』マルジュ社)

いむ みそん／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
sun01@george24.com

A trend in the study of closing section in telephone conversations
–Based on the comparative studies of Japanese-English, and Japanese-Korean –

LIM Misun

Abstract

This paper is a review of studies about the closing section in telephone conversations, adopting the framework of conversation analysis. Here I mainly mention the following three themes:

- 1) Introduction of the studies by Schegloff & Sacks(1973) and Clark & French(1981), who defined the structure of the closing section.
- 2) Survey of the closing section studies based on their definitions, targeting mainly the comparative studies of Japanese-English, and Japanese-Korean. (It also mentions the cultural differences which lead to pragmatic differences.)
- 3) Suggestions and possibilities for further studies in Japanese language education, taking up a study of telephone conversation by a native speaker and a Japanese language learner.

【Keywords】 closing section, pre-closing, closing, discourse marker, cultural differences

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)